

# 中国・朝鮮族の漢族との結婚と 民族的アイデンティティ

崔吉城

## 序論

中国の朝鮮族が中国に住み始めた歴史は在日朝鮮人の歴史とほぼ同様である。しかしその存在様相、特に婚姻においては異なる点が多い。日本人の国際結婚の配偶者の八割は在日韓国・朝鮮人など日本に住んでいる外国人である。その中で韓国・朝鮮人と結婚した人は一九九三年の統計では五二・二％である（原俊彦、一九九六・七一）。一九九四年に日本厚生省発表の人口動態統計によると在日朝鮮人の子供は一一、一六八人のなかで、片親が日本人である人は七、三八五人でありその比率は六三・八％である。また同胞同士の結婚は一、六一六組に対して日本人とは七、五三七組（八一・三％）である（「統一日報」一九九五年九月二〇日）。このように在日朝鮮人と日本人との婚姻率が高いのに反して、中国の朝鮮族は漢民族との婚姻率が最近増えつつあるとはいえない。通婚率はまだ低い。その通婚率はまだ正確な統計がないので分っていないが、金炳鎬氏は漢族との通婚は一九四九年から少しづつ高くなる傾向であるが、一九八二年黒龍江省の朝鮮族において他民族との通婚が八・一一％を占めており、都市においては二〇％くらいになっていると推測する（金炳鎬、一九九二・一

五〇)。金承哲氏は朝鮮族が漢族と結婚するようになったのは朝鮮戦争に参戦した将兵が看護婦や事務員などと結婚したのが始まりであり、その後学校や職場において少しづつ増えているが、現在五%程度と推定する。中国政府は同じ国民(公民)である漢族との結婚を奨励しても、国内婚である漢族と異民族との結婚は少なく、在日朝鮮人が法律的に国際結婚である日本人と多く結婚しているのと非常に対照的である。在日と在中の朝鮮族はともに日本植民地時代に同様な状況から移民して定着しているが、通婚においてはかなり異なっている。その原因はなんだろうか。

私が遼寧省審陽市蘇家屯居住の小学校の教員権錦蘭氏(女、小学校教員、五七歳)の協力を得て蘇家屯民政局婚姻登録処の登録を調べたところによると、合計六〇〇人の名簿(五〇人づつ一二個の綴り)の中に異民族間の結婚が四五組あり、その内訳は総計四五組の中で漢族と満族との結婚が二七組、漢族と朝鮮族との結婚が六組、漢・蒙古族三組、漢・錫伯族四組、漢・回族四組、蒙・回族一組の異民族結婚がある。朝鮮族と漢族との六組に、漢族の男性と朝鮮族の女性が四組、逆は二組である。朝鮮族の異民族結婚は漢族に限られている。朝鮮族の異民族結婚というのは蒙古族と回族一組を除いて、全部漢族との結婚である。これによると漢族は少数民族よりも多く異民族と結婚をしていることになる。異人種、異文化、異民族、異国籍間などのインターマリッジの一種(嘉本伊都子、一九九六…五三一六三)として、本稿では異文化、異民族との結婚である漢民族と朝鮮族の結婚について朝鮮族の移民史と中国の少数民族政策、そして文化的な側面などを考察し、朝鮮族の民族的アイデンティティとの関連性を明らかにしたい。

## 一 現地調査の事例

金氏(女、三六歳)は三八歳の漢族の于氏と再婚した。金氏は五人兄弟の末娘であり、上の姉(三九歳)に続いて漢族と結婚したことになる。金氏の父親は一四年前に死亡し、母親は四年前に死亡した。姉の結婚が上手くいっているのと、父親が死亡したのとで反対はそれほどなかった。于氏は  
放送局でニュースを担当している。彼の両親は健在であり、

弟、妹の三人兄弟の長男である。彼らは一一歳になるひとり娘を育てている。しかし金氏の母親は出来れば朝鮮族と結婚をしてほしかったという残念な気持ちを隠せなかった。金氏のきょうだいは長女、長男、次女、三女そして自己の五人兄弟姉妹であり、その中で次女は朝鮮族と結婚したが三女・四女は漢族と結婚している。三女は四〇歳の設計士と結婚して男児が一人いる。彼女は夫の両親とは同居していない。夫は長男であるが親を扶養する義務はないという。一二歳になる彼らの子供は漢族となっているが、その理由はただ父親の民族をそのまま引きついただけだということである。

崔氏（女、五八歳）は二男一女の母親である。崔氏は体育の教師をして退職した人であるが、一人娘が漢族と恋愛していることを知って猛烈に反対した。それにもかかわらず娘は崔氏が韓国に行つて留守中に結婚式を挙げたのである。帰国してその事実を知った彼女は痛哭した。崔氏が反対する理由はいくつかある。まず夫が独立運動をして獄死していることからプライドのある家柄として自覚しているのに漢族と結婚するなどとは不名誉であると考えていること、そしてそれ以上に重要だと思つていることは、自分の母親が独立運動のために中国へ逃亡し、知識が全くない漢族の農民と結婚して十分な意志疎通もできない不幸な生活をしたのを見てきたので、どういふことがあつても子供には漢族と結婚させないということが信条であつたのである。特に母親の苦勞を見てきたので自分の娘がその漢族と結婚するということは不幸の繰り返しになり人生のアイロニーになるといふ考えがあるからである。

本人のために譲つて考えても不満が大きいという。一応結婚式も挙げたし、子供（女、一一カ月）も生んだので孫も可愛いという気持ちはあるが、婿が教養もなく労働者であるので話す話題もなく、嫌いになった。崔氏は一人暮らしであり、娘家族は隣に住んでおり、私のインタビューに崔氏が応じて娘の家族を喚んだが娘夫婦だけが来た。崔氏の娘は子供がインタビューに邪魔になるかと思ひ、夫の親に子守を頼んできたという。娘の夫の両親は可能な限りお互いに交際したいと思つている。彼らは未熟な息子にいろいろ教えてくれることを願つており、孫娘の民族を朝鮮族にしたのである。それは朝鮮族の女性が結婚相手として漢族の女性より魅力を持つていてという通念を表わすものであろう。インタビューの時娘夫婦は緊張していた。崔氏は留守中結婚式のビデオを見せてくれた。結婚費用は主に新郎側の負担になるので、経済力を

持っている新郎の父親の兄弟など親族が主に負担した。結婚式には新婦側の父の弟の家族などをはじめほぼ参加しており、この結婚を認めていることが分かる。それは崔氏自身も認めている。

娘は結婚式をしたことについては崔氏がいては永遠に結婚式は挙げることが出来ないという当事者と周りの判断があったらしい。同行してくれた金在国氏もその点を説明してくれた。崔氏は一人も娘は生まなかつたことにして、娘には何も期待していない。さらに彼女は自分の経験から漢民族との結婚がいかに不幸になるかは分かっている。娘のためにはすべてを理解する心があるが、婿に会ってみて将来性があるわけではなく、ただ平凡な人生を送り、希望のある人生を放棄していることがもつとも気に入らない。実は痛いところを話したくないのでインタビューを断りたかつたが夫と文学や芸術活動を一緒にした作家の金氏の紹介なので断りきれず応じるようになったと繰り返し話していた。娘夫婦は罪人のように崔氏の命令に従うことで、自分たちの結婚生活を許してくれることだけを待つような態度である。その一年後（一九九七）再び訪ねた時、崔氏は熱心なクリスチャンになって娘の結婚を認めるようになっており、娘夫婦も教会に出るようになったという。

韓景旭氏が調査した吉林省星火村を訪ねた時、私は漢族の女性が朝鮮族の男性と結婚生活をしている家に泊り、仲むつまじい雰囲気ですぐに暮らしていることを観察した。このように朝鮮族村でもほぼ一―二軒ほど漢族が住んでいる。この夫婦は結婚したばかりで子供はなく、姑と一緒に暮らしており、嫁も姑も互いに大事にしあっており、夫にも誠実であり今のところ順調にいらっているが将来は分からないという見方をしている人が多い。韓氏のインタビュー記録にはこのような民族間の結婚について否定的な見方をしていく内容がある（韓景旭、『中国の朝鮮族研究』未刊の五章二節）。私がその家に泊まった時夜遅くパーティがあった。夫婦は仲良くおそくまで踊ったり、歌を歌ったりしたが朝鮮族のものもあれば漢族のものもあった。

朝鮮族の知識人層では国際結婚のように漢族と結婚する傾向も多く現われている。特に雑居地域において若い女性は漢族との結婚が一般化していく傾向がある。それは朝鮮族の男性の男性優越主義に否定的であり、逆に漢族の男性は従順な

朝鮮族の女性を結婚相手として好むので漢族との同化が急増すると予想されるという(朴惠蘭、一九九六・八一)。しかしその反対の例もある。延辺大学の元副学長の鄭判龍氏が漢族の女性と結婚したのはその代表的な例である。鄭氏は父が韓国全羅道出身であり、モスクワ大学でロシア文学を専攻し、留学した青年時代に漢族の女性と結婚して模範的な家庭を作ったということである。朝鮮族の中では神話のように語られている。

朝鮮族の許氏(女、三五歳)は 農業学校の時学友であった漢族の王氏(三五歳)と結婚したが、両方の親から望まれない結婚だったので両家の親同士は会っていないという。漢族では結婚した両家は親しくなるのが一般的なので、この事実を残念がっているようであった。

満族の戴氏(三〇歳)は朝鮮族の許女(二九歳)と七年前に結婚した。五歳の息子は朝鮮族になっており、妻が朝鮮族から離れたくないという意志を尊重して延辺で職場を持つようになったという。朝鮮族は満族とは祖先が同じであるという神話があり、高句麗神話にある柳花という女性の人名は柳の葉を女性性器として信仰するものと関連するという。また歴史的には清末に朝鮮族が満族と通婚したので朝鮮族と満族は近いと主張し、満族との結婚を正当化する。延辺地区には漢族との結婚より満族との結婚を好む傾向であるという(延辺大学、金東勲教授談)。

長春市鐘北に住んでいる朝鮮族の李氏(三六歳)は漢族の女性劉氏(三六歳)と結婚して一二歳の息子がいる。息子は朝鮮族になっている。その理由はただ単に父系によるという。結婚には両側から若干反対された。特に劉氏の親が朝鮮族の男性という飲酒と暴力のイメージがあったが高校時代からの学友であり、李氏の人柄を知ってすぐ承諾してくれたという。伝統的に朝鮮族は漢族や他の少数民族との結婚はしなかった。それはロシアの朝鮮族も同様であるという。審陽市在住の金氏(六六歳)は他民族と婚姻することはよくないが恋愛についてはしようがないという。朝鮮族は女性が漢族と結婚することをすごく嫌いなが漢族の女性が嫁入りしてくることにそれほど反対しない。漢族の女性は怠け者だとか汚いなどと言いながらも朝鮮族を失うことにはならないということである。漢族が嫁入りしてくることは場合によって朝鮮族の誇りになる。「吉林新聞」(一九九七、三、一五)には蛟河市天北鎮の女性主任の王氏の記事が載っ

ている。

王氏女は一九六四年蛟河一中学校を卒業した知識と美貌のそなわった女性として結婚相手として羨望的であった。しかし父が国民党員であったことから苦勞している時、その家に経済的に援助していた朝鮮族の青年の金判吉と結婚しようとしたのである。しかし金氏の両親は特に父親は息子に対して暴れ、保温ビンを投げるなどして漢族の嫁をもらうことに強く反対した。しかしその両親や村人の悪い噂も彼らの結婚を止めることは出来なかった。一九七二年の五月に彼らは結婚式を挙げた。彼女は夫の両親と六人兄弟の長男の嫁になった。まず彼女は言葉が通じないので苦勞した。特に朝鮮語の敬語は難しかったという。姑が餅を作るために用意した蓬でスープを作ったので怒られたこともあった。しかしいまは朝鮮語が流暢になり、家族の髪もカットしてあげたりしている。彼女は漢族の活発な性格で家庭は和氣霽々と楽しく暮らしていた。吠を作る労働をして稼いで家族には良い衣類を買って上げて自分も質素なものだけを着了。舅が寝たきりになっても最後まで看護し、姑の還暦の時には朝鮮の民族衣裳で正装し、あいさつをして村人から称賛された。一九八四年に夫が盲腸や胃切除手術などによって仕事が出来なくなっても四ヘクタールの水田の農業を一人でした。一九九〇年には一五、〇〇〇キロの穀物を国に出した。これは全鎮の単位でトップであった。王氏は一九九二年朝鮮族村の女性主任に選ばれた。彼女は三、八婦女節に「模範姑」、「模範嫁」、「模範夫」を表彰したり、舞踊大会、家族計画、農業技術、党知識の学習などによって文盲率を低下させた。また自習して一年間研修をして医者資格を得て村の医者として勤めており、遠い僻地まで往診したり、特に助産をしたりしている。一九九六年には「吉林省文明家庭」と「吉林市致富女能手」の称号が与えられた。

吉林市の朴氏（三一歳）は四人兄弟の末息子であり、漢族の女性と結婚した。もちろん家族や周りから反対された。

漢族の女性と結婚した人は早くから都会で育った、大体は三〇歳以下の知識人である。特に中国の開放政策、人口の移動、国際化などによって若い世代において朝鮮族が漢族と結婚する例が急増する。その理由として「漢族でもいい人はいる」「漢族の男性は妻を大切にする」「男性も家事をする」「漢族と商売するのに有利である」「出世した漢族から結婚相手

を探しやすい」「付き合う機会が多い」「朝鮮語より中国語が、あるいは中国語しか出来ない」などを挙げている。

## 二 植民地時代の移住形態

朝鮮族は早くも一八世紀から朝鮮半島に近いところに移住し集団居住しており、旧満州の北部においては主に二〇世紀の日本植民地時代に「開拓移民」として集団移住させられて定着した。つまり日本政府による集団開拓移民であって、それが自治区にもなっている。これは原則的に自分の世界を以て漢族と分離して生活する移住型であった。したがって朝鮮族は固有の朝鮮文化や社会構造を維持し、朝鮮語を私的にも公的にも使用している。多くの韓国人はそれを古い「朝鮮文化の化石」のように思っている。現在でも遼寧省や黒龍江省の都市を除いて、吉林省・延辺自治州の農村はまだ典型的な朝鮮族集団居住が多くある。

朝鮮語による教育が初等教育から高等教育まで出来るシステムを持っている。このように言語や文化を持ち、それを保っていることは同じ中国人でありながら民族的文化的バウンダリーを持っていることである。このような集団居住は地理的に漢族とは離れていたこともあり、社会的にも文化的にも遠かった。一九三七年に開拓移民者として延辺地域の汪清に移り住んでいる朴再容氏（一九三三年生）は満州拓殖株式会社から土地と農牛などを貰い、塙で囲まれた村に住んでおり、戦後初めて漢族を見たという。当時は漢族と混じって住むこと自体を避けるのが一般的な傾向であり、市の政策でもあった。中国政府は少数民族優遇政策を取っており朝鮮族が民族文化を保てるようにしたのである。朝鮮族は自分の民族文化を保持発展させるようにしている。大学入試などでも少数民族を優遇して加算点数をプラスしている。

中国の人口政策は少数民族を分離集団居住させている。さらに国民の移住、移動を制限してきたし、閉鎖的な社会主義の政策によるものでもあった。中国の少数民族の優遇政策は朝鮮族社会においても抵抗なく受け入れられており、歓迎されている。ここに分離独立して集団居住した朝鮮族たちは漢族と付き合う機会が少なく、通婚は稀であった。朝鮮族と漢

族が分離して居住するということは結婚によって血が混じり合うことをさけていたことにもなる。つまり個人や夫婦だけのことではなく、村や民族との関わりの意味が強い。例えばたまたま漢族からきた嫁だが悪い嫁だという悪評がでたらそれはすぐ村中に伝わって困ることがある。逆に朝鮮族の女性が漢族の村に入って勤勉であり清潔であるという評判は村中に広がり、喜ぶということもあるがその精神的な負担は大きいという。いずれにしても村に入ることは個人や夫婦と親族だけのことではなく、村や民族の問題と関わることになる。従って異民族との結婚、異文化との結婚を避けようとしたのである。

しかし最近延辺以外と都会では漢族とまじって住んでいる人が増えている。延辺自治州でも集団居住から漢族などと雑居してきており、渾春市では朝鮮族が少数であり、漢族と満族などが多数を占めており、一九五三年までには朝鮮族が多数を占めていたのが一九九〇年には少数になっており（金東和、一九九五・四〇）、生活レベルで雑居するようになり、中国に住んでいながら中国・漢族の影響を全く排除することは出来なかったのも当然である。朝鮮族の住宅の形態が延辺自治州においては朝鮮の伝統的な形態が保存されているがその他の地域では大きく漢化している（朴慶輝、一九九四・二〇五）。延辺大学女性研究所の姜淳和氏は散在村で漢化が進んで民族文化が脅かされているともいう。中国は開放政策以降、国内の移動はもちろん海外への移動も比較的容易になり、社会はあつという間に変わり始めた。特に六〇年代以降飢饉の時は主に山東半島から漢族が東北地方へ労働移民したり、中国のなかで人口移動が激しくなったりした。漢族が労働移民として多く入り、漢族と朝鮮族の比率は朝鮮族が低下していく傾向にある。インフォーマントたちは最近漢化が激しく進み漢民族との結婚も増えているという。これは離れて住んだ集団居住形態が異民族、特に漢族との結婚を難しくしたことを意味するのである。しかし都会では若い知識人の間で漢族との婚姻が増えている。つまり朝鮮語が出来ない散居地域の人、教育水準の高い人たちの中で漢族との結婚が多くなっているという（姜在植、一九九五・一八六―一八九）。朝鮮族の村では漢族は先住民である朝鮮族との結婚を望んだ傾向もあった。



### 三 性差観の差異

遼寧省や黒竜江省など比較的散居傾向の強い地域においても、さらに最近都市においても漢族との結婚を忌避する傾向が強い。延辺地域の朝鮮族の大学生たちは結婚相手は必ず朝鮮族でなければならぬと考えている（姜在植、一九九五・一八六―一八九）。特に朝鮮族の女性は「漢族の男性と結婚したら一生台所に入らなくてもよい」といい、それを好みながらも（韓相福・権泰煥、一九九三・二三七―八）結婚率はまだ低い。漢族との結婚は一種のタブーのようなものがある。それは家族内の男女の役割の差異が大きい理由である。金承哲氏はある日本人女性の言葉を引用して中国人男性の結婚相手としての魅力を強調する。中国の男性は家庭を大切に、教養があり純朴なしかも人柄として信頼性があり、結婚相手としての国の男性よりも良く、朝鮮族の男性に比べて漢族の男性は女性を尊重し愛し、人柄としても信頼性があるといった（金承哲、一九九五・七五）。しかし漢族との結婚には少なくとも家族や周りの反対などのハードルがある。結婚した人とのインタビューでは多かれ少なかれ反対を克服したという話が多い。漢族側からは反対も少なく、一般的に少数民族との結婚に対する抵抗感は大きくない。たとえ反対してもそれは民族差別ではなく、人格や資格に関するものが主である。朝鮮族のインフォーマントは漢族との不婚の理由について民族の自尊心があることを前提にして、審陽市在住の李氏（女、六四歳）は漢族は親不孝であり、男性は朝鮮族の親族と交わることがほばないし、敬老思想や貞操観などが弱く、無礼な人も多いという。

伝統的に朝鮮族の男性は台所へ出入りしない慣習がある。それは家事は男のすることではないという観念があるからである。朝鮮族の男性は漢族の男性が男らしくないと考えていた。朝鮮族の男性が漢族の女性と結婚した時、嫁の親孝行が足りないという。その逆も同様であり、朝鮮族からは漢族の婿にも不満が大きい。いずれも一方的に朝鮮族側から漢族へ否定的な態度があり、漢族からのクレームはさほど多くないのが普通である。この点において朝鮮族は韓国人と結婚する

より漢族と結婚したほうがましであるという。なぜなら韓国人は同じ民族であつても中国より儒教思想が強く残つており、男尊女卑が強い国であるからである。李承梅氏は韓国人の男尊女卑に驚いたという。中国の朝鮮族は社会主義によつて家事は主に女性がやっているが男女平等はかなり進んでいる。それは漢族が少数民族に対して否定的ではなく、民族差別はあまり持っていないということである。ただ漢族とは言語の壁もあり、食生活や文化様式が異なっているので難しい。若い人同士の結婚においては夫婦の問題だけではなく、年齢と世代の差がある姑嫁関係はもつと難しい。

李光奎氏は朝鮮族は清潔な民族の性格や文化的な差異から離婚を避けるし、混族婚姻は朝鮮族の男性と漢族の女性との婚姻が多く、しかも離婚が多い。それは父母の反対があつただけではなく、夫婦当事者間の文化的差異によるものもある。朝鮮族の男性は中国の男性のように女性を大切にせず家庭的でもないことと、一方中国の女性は気が強く、家事をあまりしないことが葛藤になり、簡単に離婚するのであるという(李光奎、一九九四・二三五)。つまり文化的差異によつて結婚を避けたり、あるいは結婚しても離婚することが多いという。一方漢族には朝鮮族が酒を飲みよく踊り、暴力を振るうというイメージがあるが同時に聡明だというイメージもあり、結婚相手として好むようである。漢族は多民族国家の国民として結婚において民族を問題視しない。また国内の少数民族をはじめ国際結婚についても開放的であり好む傾向がある。

#### 四 民族的アイデンティティ

朝鮮族は自ら生きる場所を得るために、あるいは開拓移民者として中国東北地方に移民・移住した。その中には抗日独立運動者もいたが全体から見れば、意識を持つ知識人は少数であつた。しかし植民地の歴史では主に抗日運動を扱っており、大衆が蒸発しているようである。当時大部分の朝鮮族はそれほど民族意識を強く持つていたとは考えられない。民族意識が自覚され、強まったのは、民族学校が多く設立されて、朝鮮語で初等から高等まで教育し、文盲率を低下させ、高

學歷を自慢するなど朝鮮文化の優越感を強調するようになってからである。

日本時代になって開拓移民者として中国東北地方へ行った人々は、日本人は一等国民、朝鮮族は二等国民、中国人は三等国民という序列を作った。こうしたことから中国人（漢族）への蔑視観が生まれたのであろうし、それが依然として朝鮮族の優越感として残っている。その時「二等国民」といわれた朝鮮族は漢族から見ると日本人の手先のようにであり、朝鮮族としては優越感をもつものであった。しかし解放後に朝鮮族は漢族から復讐されたり非難されたりした。したがってその二等国民ということばは日本植民地が民族分裂政策として作ったものであり、朝鮮族自身が語れない一種のタブーであるという（金東勲、金承哲談）。日本人がすべて撤退した後には朝鮮族は一等国民になったようである。彼らは清潔観をもつて、漢族を蔑視し、中国人に対する差別観を持ち出して汚い、怠け者、無礼なものとしている。漢族地区に散居し、漢族と交流融合する漢化現象が現われる一方そこに心理的な壁を作り、雑居しながら異なるという朝鮮族としてのアイデンティティを持つようになる。その重要な要因が民族教育と差別構造であろう。

一方在中朝鮮族は中国を「わが国」として愛し、大国の国民としてプライドを持つ場合も多い。つまり中国の国民、公民として韓国は異国となる。従来在日朝鮮人が同化の傾向が強かったのに対し、在中朝鮮族は異化の傾向が強かったといえる。「在日」は外国人であれ文化的に同化している。しかし「在中」は中国人でありながら同化せず異化の傾向を強く持っている。韓国人に対しても反感を持ち、韓国は小国であり、人の心も狭い小心者だと思う。朝鮮族は大人人として中国にアイデンティティを求める。『日本人のための中国人と韓国人』（三五社、一九九八）の著者金在国氏は中国人として中国を「わが国＝大国」意識を持って韓国を批判する。つまり中国人の大国心（包容性、寛容、沈着、ゆっくりして落ちついていて、忍耐など）を以て韓国人の小国心（短気、軽率、喧嘩、暴力など）を非難する。

## 五 涉外婚姻

中国朝鮮族は漢族との結婚は避けながら韓国人との国際結婚を好む傾向にある。最近中国と韓国関係が正常化してから韓国を訪問する人口は増え、一九九四年三月までに一二万人の訪問者があり（金東和、一九九五・六）、「中国公民が外国公民との婚姻を涉外婚姻」として韓国人との結婚が盛んになった。法律的には国際婚であっても同族婚であり、抵抗はない。さらに韓国の経済や文化の高い水準への指向がそれを促進させている。それは経済的なメリットが大きい、当然朝鮮族社会の新婦不足現象などの問題をおこしたのである。朝鮮族の女性が韓国人男性との涉外婚姻をすることにより朝鮮族社会に性比の不均衡が生じ、男性の結婚難を加速させたのである。一九九〇年の統計によると朝鮮族の三五歳以下の男性は二六三、四五一一人、女性二五四、六三九人であり、女性が男性より八、八一二人少ない。このように女性が少なく、朝鮮族の男性が結婚をしにくいのは韓国の男性が結婚相手として朝鮮族の女性を連れていくからであり、朝鮮族社会の危機を感じさせるのである（金竹山、一九九五・二一九）。それだけではなく性に関する価値観も大きく変った。また結婚相手を知らず、賄賂を使い（黄承淵、一九九五・八四では三四、五％）、偽装結婚までする人も多いという。

延辺自治区内では涉外婚姻の相手は圧倒的多数（九五％）韓国人であり、一九九〇年には一二人、一九九一年には三四人、一九九二年には六二人、一九九三年には六二五人になった。この自治区の全涉外婚姻の九五％が延辺の女性と韓国の男性との結婚である。金承哲氏はその特徴について婚姻数の急増、恋愛期間が短い（四―五日）、再婚者が多い（二四％）、年齢差が大きい（五年以下二五％、六一―二年五八％、一三―二〇年一五％、二一年以上二％）点を挙げて、問題点として結婚の動機が出国、結婚紹介人たちの金儲けと売買婚、結婚詐欺などを挙げて、経済的な要因が重要であるという（金承哲、一九九五・五八）。私が一九九七年二月三〇日延辺自治区涉外婚姻登録処を訪ねた時は年末に結婚許可書をもらおうとする人で超満員であった。日本人の男性と結婚する一人の女性を除いては全部朝鮮族の女性であった。彼女らの家族は韓国から

仕送りをしてもらうことはもちろん期待しており、韓国の経済が金融危機に追い込まれてIMF時代に入るといった話がマスコミに流れ心配している。これらの人のケースは法律的には国際結婚であっても同じ文化を持っている民族同士の結婚であり、別に異民族や異人種との結婚とは異なる安心感がある。その上もし結婚が成功した場合には本人の幸せはもちろん家族や近い親族などにもその影響力は大きい。その一例を挙げてみる。

長春市の楽東村は一九七四年永吉県のダム建設によって水没地区から集団移住させられてきた。村の全体三〇〇〇戸の中三〇〇戸が朝鮮族であり、二つの村に集団居住している。朝鮮族の村長の金恩太氏(四五歳)はこの村が豊かになったのは最近八〇戸が韓国へ「労働送出国」「結婚送出国」したことによるものだという。韓国で働いて送金する金額は中国においては相当大きい金額になり、それを資金にして商売をして成功したという。そのような食堂は一二軒あり、公衆浴場、ノレバン(カラオケ)、工場(化学繊維)などがある。この村では労働者として、あるいは結婚のために送国している欠損分をより辺鄙な田舎から受け入れる。農村の人はより高い労賃やよりよい生活環境を求めて都市へ、都会人はさらに韓国、日本、シンガポールなどへ出稼ぎ、移民、結婚などをして出る。そして都市がより辺鄙な田舎の人を吸収し、それは連動し影響を及ぼし朝鮮族社会のモビリティを高める。そこには北朝鮮から結婚を求めて渡ってくる女性も多いという。それを幹旋するブローカーは中国の二万元(一万元が七〇〇元)を手数料として取るという。

それに伴う社会問題もある。結婚と偽装結婚などの詐欺が多い。遼寧新聞社・朝文新報の記者李徳権氏と被害者調査委員会会長の李相太氏に聞いた話と訴えによる資料を整理してみる。一九九五年三月に韓国の法務部から査証認定許可制が実施され就業の目的で韓国への入国が難しくなり、出国戦略として国際結婚が急増するようになったという(李徳権、一九九七・二二九)。A(女)氏は一九九五年一月に韓国人の李氏と会って結婚することになり、李氏が結婚手続きのために中国貨幣二万元を要求したのでそれを支払ったが彼は帰国して消息がなくなった。審陽市和平区B(女)氏は一九九四年一月に中国に結婚相手を探しにきた崔氏と結婚した。崔氏はその朝鮮族の妻を韓国へ連れていかないで中国において事業を始めた。彼女は事業のために二、四〇〇ドルと五万元を貸してあげた。その後崔氏からは連絡がない。彼女は韓国へ行く

ことが重要な目的であったが結婚詐欺されたことを訴える。C(女)氏は偽装結婚の契約金として朴氏に一次五五〇万ウォン、二次三九五万ウォンを支払い、残金は韓国に到着して払うことにして身分証明書と戸口簿などもあずけてしまったがその後消息がないと訴える。D氏(四三歳女)は息子と娘を勉強させるために韓国の婚姻相談所を通して結婚を名目にして韓国へ行くために中国の貨幣の三万元を払ったがその後連絡がないという。E氏(女、一九六五年生)は一九九六年二月に韓国人の金氏(一九五二年生)との結婚証を受け取った。その後夫の中国滞在費と紹介費など負担したが彼はE氏を韓国へ招待せず、帰国後消息がない。そして韓国の法務省へ申告し結婚の取り消しをしてもらったという。F女は一九九五年結婚招請費として一三万元を払って詐欺された。G女(三〇歳)は七万元を払って偽装結婚をして韓国までいったが相手が性交を要求したので法務省に申告したら強制送還されて自殺した。H女は韓国人男性と中国で結婚式を上げて結婚生活をしたが韓国へ連れて行くための手続料金として八万元を詐欺されたという。I女は離婚女で一〇歳の娘をもっているが韓国人の男性に巡り合って性関係をもっていたが紹介人に結婚の手続料としてお金を支払った。しかし間もなく男性から結婚を考え直したいということを知り、衝撃を受けた。そしてその精神的経済的損害賠償として一〇万元を要求している。

これを整理してみると(一)韓国人と紹介人から結婚や偽装結婚のための手続きを理由にして性関係と金を詐欺されたこと、(二)結婚はしたが韓国へ連れて行かず消息がなく、精神的経済的に損したということなどである。この事例でも結婚よりは韓国への出国が重要なポイントであることが分かる。処女が良い条件の結婚相手を見付けるといふ話も聞けるが未亡人も人気がある。また既婚者が離婚して韓国に嫁に行くという、偽装婚姻のケースも少なくない。また結婚に便乗して女遊びをする観光客もいる。

知識人はこのような韓国人との結婚が増えて朝鮮族社会が脅かされているという。延辺大学の鄭教授は韓国人と結婚した女性が二万人にもなったことについて、朝鮮族全体が二〇〇万であるので女性が一〇〇万とみて、結婚出来る人が二〇万と見るとその一〇分の一が韓国人と結婚するということは朝鮮族男性の結婚難を意味するといひ、それは朝鮮族社会の崩壊を意味すると主張する。そして韓国政府の批判まで及ぶ。労働送出については中国人以上厳しく取り締まりながら結

婚による入国許可は簡単であるので偽装結婚が盛んになり朝鮮族社会の崩壊に直面しているという。彼は韓国政府は経済的な協力でもある「労務送出」を奨励すべきであり、「婚姻送出」は厳しく取り締まる政策を取って朝鮮族社会の存立を守ってくれるべきであると主張する。残酷なほど厳しい労働状況の中でも労働者たちが韓国へ入り、また韓国企業が中国へ入り、多少豊かになったのも事実であるが、朝鮮族社会にカラオケ、現地妻、売春などがあつという間に流行り、中国における朝鮮族のイメージダウンがあり、せつかく積みあげた朝鮮族のプライドがなくなる危機に直面しているという。

このような韓国人男性と朝鮮族女性の結婚は漢族との不婚や通婚圏が狭かったことから通婚圏の拡大の意味もある。それが長い間離散していた民族が開放政策や国際化によって再結合しようとし、爆発的になり、多くの問題をも引き起こしている。また国際化により少数民族の自覚により民族性を求めて、朝鮮文化を再創造しようとするエスニックナショナリズムの高調ともいえる。また、社会主義国家から脱出し、経済的に豊かな母国へ回帰しようとする朝鮮族の意識もある。あるいは恋愛や結婚に失敗して女性が脱出口の模索として韓国人と結婚するという意見もある（成チへ、一九九六・二二三―二六〇）。

朝鮮族には漢族との結婚を避けようとする結婚差別がある。少数民族のマジョリティーへの逆差別のような現象が存在する。しかし少数の知識人の中で異民族結婚が行なわれている。それは同じ国民同士の結婚であり特別失敗とか成功ということではない。ただ互いに民族的アイデンティティを自覚させる契機になったと当事者たちはいう。しかし多くの人は結婚しても必ず離婚するのだと否定的に言っている。そして失敗した事例を誇張して噂する。また、韓国人との結婚を通して中国人として自覚する人も多い。中国の料理に比べて韓国の食事は量が少なく、白菜ばかりで口に合わないという。そんなものを食べた人が太って歩くのは不思議でならないという人もいる。メニューも多様な中華料理に比べてキムチなどは料理ではないというのである。都市の朝鮮族の女性が韓国の農村の男性と結婚して失望して逃げたり、離婚したりする。相手に関する知識もなかった同じ民族であることと経済的に先進国だということと期待感をもって結婚するので失望する場合が多く、そのショックも大きいという。こうして母国に対する否定的な反感を持ち、中国朝鮮族としての自尊心

と同時に中国国民としてアイデンティティを自覚するようになるという（黄承淵、一九九五・八九―九〇）。そして中国人男性に対して再認識するのである。朝鮮族の女性が一番不当だと思うのは韓国社会の男尊女卑の強さである。

## 六 比較考察

漢族と朝鮮族は民族が異なっているが表面的には区別しにくい。しかし漢族と朝鮮族の間の子供は混血児であり、頭がよいという話もよく耳にする。漢族側では朝鮮族との子供は頭がよいと考えられているという。民族は出自によって決まる。父母がともに朝鮮族であれば子供も朝鮮族になるが問題は漢族と朝鮮族が結婚した場合に生まれた子供は原則としては子供の選択によるものであるが、実は父母が決める通り確定される。それは父母が決定することであり、父系制とか母系制などとは無関係である。したがって漢族だけの結婚よりも民族を選ぶ機会があるので有利といえる。ただ民族の純粋性は欠ける。したがって雑婚は民族の混雑性はあっても民族の選択権が与えられており有利といえる。一方では歴史、文化などが異なる民族とは血を混ぜたくない、民族の純粋性を守ろうとすることであろうが朝鮮族のインテリはよく文化を失なった満族を例にしていう。満漢不婚の結婚規制が解かれて主に満族が自民族のアイデンティティを主張できなくなったことであろう（植野弘子、一九九六・四八）。また回族は異民族と結婚しても民族的アイデンティティを保っているが（武内房司、一九九〇・一七六）、どうして朝鮮族は中国人と結婚したら民族意識や文化を守ることが難しいのかという人もいる。中国語が出来る人が漢族との結婚の機会が多く、結婚観が開放的であり、民族婚姻や「涉外婚姻（国際婚姻）」が多い。

現在国境、差別、文化などの壁を越えて国際婚、人種婚、民族婚などが多く行なわれている。まさに「愛は国境（国民）を越える」ようである。国際化による人間関係の拡大は国際結婚なども普通の結婚や生活様式になっていくようである。中国の朝鮮族が混じり合うことによって漢族との結婚が急増しており、在日朝鮮人はもともと散在して居住したので日本



人と結婚するチャンスが多いのも当然である。しかしその意味は一樣ではない。アメリカにおける人種間結婚が国内結婚であつても人種差別、特に黒人と白人との結婚は人種差別もあつてその極端な差別 (the last taboo) といわれていた結婚が、その壁は低くなり毀れつつあり、一九六〇年代民権運動以降急増している。一九六七年大法院は異人種結婚に反対するすべての禁止は憲法に違反するという判決を出した。一九九二年アメリカの統計局によると白人の子供は毎年一五%づつ増え、黒人の子供は毎年二七%づつ増えるが、混血児の子供は毎年五倍づつ増えるという (Amy Iwasaki Mass, The Biracial Experience in Japan and the U.S.A. Comparison, Chugoku-Shikoku Anthropology Association 7th Annual Meeting, Hiroshima City, June 29, 1997)。一九七〇以後異人種間結婚が三〇〇%になつていともいう (Yinger, 1994: 161-166)。韓国系アメリカ人の女性と白人との結婚が激増しており、一九八六年では一三・七%の女性が韓国人以外のひととの結婚であり、その六一%が白人男性との結婚である (Min, 1995: 219-228) それに比べると中国の朝鮮族と漢族との結婚はまだ少ない。しかし最近急増している傾向について朝鮮族のインテリたちは中国朝鮮族の社会が壊れるという危機感を感じている。在日朝鮮人は被差別感を持つていながら日本人と結婚する。それは結婚を通して、差別を避けようとするものであり、アイデンティティの弱化につながる。また日本文化への同化が差別を越えるようになったのを意味するのも知れない。日本人との結婚が、差別を逃れようとするいわゆるパッシング (passing) であろうか、愛情が差別を越えて日本人と結婚するだろうか。あるいはいわれているように是在日朝鮮人が差別されていないから通婚するのだろうか。在日朝鮮人側より日本人側の壁が厚くないから通婚が出来るとも考えられる。在日朝鮮人の日本人との結婚は不幸な歴史や差別感をもつていながらも歴史的密接な関係、漢字文化や儒教文化を共有しているからであろう。しかし在中朝鮮族は漢族にたいして優越感をもって民族的アイデンティティを意識しながら漢族との結婚を妨げる一方的な壁を立てている。

歴史的に朝鮮が中国を尊重し中国文化を受容した。しかし多くの朝鮮族が日本植民地時代に中国東北地方へと移住してからはじめて中国人に出会つてからは漢民族への尊重心が逆転して蔑視観になった。日本人が朝鮮人は汚いというイメージを持つのと同様に、朝鮮族は中国人が汚いといい、民族的優越感を持つようになった。朝鮮族は儒教的文化背景、古い

歴史を保っている文化民族、抗日運動、文字をもっていること、教育水準の高さ、清潔さ、少数民族としての悲哀などを以て民族的アイデンティティを保っており、他方漢族との不婚が民族性を保つことであろう。このように朝鮮族が漢族との結婚を忌避することは民族的アイデンティティを守るためであろうが、その壁を自ら作っていたのである。また旧ソ連の朝鮮族も他民族と結婚を避ける壁を自ら作っている。

結婚は民族的アイデンティティを強める文化的機能もする。吉林新聞の副総編の朴文熙氏は朝鮮族は結婚式や還暦祝いなどの伝統儀礼によって民族文化を再認識するという。私は遼寧省営口で朝鮮族の結婚式に参加して観察した。式は新婦の庭で行なわれた。新婦と新郎の相見礼、礼物交換、新婦の親族代表として新婦の父親の挨拶、新郎の親族代表として新郎の母親の挨拶、新郎と新婦の来賓に対する挨拶、祝辞の順序で行なわれた。この式順は中国の一般的なものである(潘允康、一九九四・八〇―八一)。新郎の父は親孝行は忘れず実行すべきことを強調し、小学校の校長は民族を忘れてはいけなといった。式が終わって新郎と新婦は大きいお膳の前に座って、大声やにぎやかな雰囲気の中かで祝杯を受けチップをあげる。その後、年齢別、性別、友人、親族などに分かれて夕方まで酒を飲んだり、ご馳走を食べたりする。一方庭では踊りが始まる。ステレオの音楽に合わせて最初は当事者の近い親族だけが踊り、後にその他の人々も加わって踊る。そして村人は新婦新郎の初夜の様子を窓から覗いたりする。そこには朝鮮の伝統的な風習が営まれており朝鮮民族のアイデンティティが強調される。

## 結論

中国の朝鮮族は漢民族をはじめ異民族間の結婚はしなかった。それはまず接することが少なかったからである。多くの人が植民地時代に開拓移民として定着し、長い間、社会主義国家として民族移動を国家が管理し、少数民族を集団居住させたので、異民族との交流が少なかったのである。それが漢民族などの異民族との結婚が行なわれなかった要因の一つで

ある。結婚忌避の理由は朝鮮族が分離して「民族聚居区」で独立的な生活をすることによって民族的アイデンティティを持ち(費孝通、一九九七・四六九)、漢族との結婚に違和感を持っていたからである。また抗日運動などによって漢族に優越感を持っていることもその原因の一つである。次に結婚生活と直接関わる問題としては家族や親族関係が漢族とは異なっている点があげられる。

漢族と朝鮮族は出自、言語、生活文化なども異なっている。漢字文化や儒教文化は共通していても、それも漢族と朝鮮族は質的に異なっている。特に言語の壁は高い。朝鮮族の中国語は不十分である。さらに家族構造などが異なっている。さらに清潔感などの生活習慣なども多く異なっている。これらは漢族との結婚を妨げる。このような結婚の忌避や禁止は当然通婚圏を狭めるものであり、特に朝鮮族は少数民族としては通婚圏を拡大しようとする。

狭められた通婚圏を拡大しようとするところに海外の同族結婚を発見したのである。法律的には中国人同士の漢族と結婚が自然なようであるが、それよりは文化的に同様である韓国人との結婚を求めるのである。韓国人との結婚の選好は「労働送出」と同様に経済的な目的の「結婚送出」という出稼ぎ型の同民族間の結婚である。しかしこれで全部説明することはできない。朝鮮族の内婚だけでは通婚圏が狭かったこともあって、結婚に失敗した人が脱出するとか、結婚を通して海外への進出が開けるといふ説明も可能である。この結婚について李承梅氏は全体的に見て経済的な理由が一番大きいという。また韓国で農村人口の過疎化にともなう農村の青年の結婚難から海外から嫁を求めるようになった。中国観光ブームののって韓国の農村青年たちは中国朝鮮族社会へ花嫁を探し旅行した。その需要と供給が中国朝鮮族と韓国人の国際結婚である。しかしそれは民族同士混じり合う機会が多くなり、国籍よりも民族というものがいかに重要であるかを証明する。

#### 参考文献

- 武内房司、「少数民族のアイデンティティと宗教」『文化人類学』八、アカデミア出版会、一九九〇  
金炳鎬、「中国朝鮮族の人口発展と分布変化の傾向」『朝鮮学研究』、黒龍江朝鮮民族出版社、一九九二

韓相福・權泰煥、『中国延辺朝鮮族』、ソウル大学出版部、一九九三

朴慶輝、『中国朝鮮族の衣食住生活風習』、集文堂、一九九四

李光奎、『在中韓人』、一潮閣、一九九四

潘允康、園田茂人監訳、『中国の家族と婚姻』、岩波書店一九九四

金承哲、『中国延辺朝鮮族女性と韓国男性との涉外婚姻実態』『中国朝鮮族文化現況研究』黒龍江中国朝鮮民族出版社、一九九五

黄承淵、『中国朝鮮族の韓国社会への適応実態に関する調査研究』『中国朝鮮族文化現況研究』黒龍江中国朝鮮民族出版社、一

九九五

金東和、『中韓経済文化交流と中国朝鮮族』『中国朝鮮族文化現況研究』黒龍江中国朝鮮民族出版社、一九九五

姜在植、『延辺地域朝鮮族大学生の生活意識に対する研究』『中国朝鮮族文化現況研究』黒龍江中国朝鮮民族出版社、一九九五

金竹山、『韓国熱と民族文化の発展』『中国朝鮮族文化現況研究』黒龍江中国朝鮮民族出版社、一九九五

朴惠蘭、『開放時代の中国朝鮮族の女性』『女性と漢民族』、学問出版社、一九九六

植野弘子、『満族の婚姻と女性をめぐる関係…伝統的慣習と漢化』『満族の家族と社会』（愛新覚羅頭琦・江守五夫編）、第一書

房、一九九六。

成チへ、『中国僑胞女性と韓国男性との結婚』『女性と韓民族』、学問出版、一九九六

原俊彦、『国際結婚と国際児の出生動向』『家族社会学研究』八、一九九六

嘉本伊都子、『国際結婚をめぐる諸問題』『家族社会学研究』八、一九九六

費孝通、『エスニシティの探求』『国立民族学博物館研究報告』二二―二、一九九七

李徳権、『朝鮮族を齧って食う現地妻の風』『文化山脈』、黒龍江中国朝鮮民族出版社、一九九七

Yinger, J.M. *Ethnicity*, State University of New York Press, 1994

Min, Pyong Gap *Asian Americans*, Sage Publications, 1995

※査読者諸方のコメントなどに感謝したい。